

第 2 回建設検討委員会資料 用語集

該当資料	用語	用語の説明
資料 2	生活系ごみ	一般家庭から排出されるごみのことで、「燃やすごみ」、「燃やさないごみ」、「有害ごみ」、「粗大ごみ」、「資源ごみ」を総称していう。
資料 2	家庭系ごみ	生活系ごみから「資源ごみ」を除いた量を表す。
資料 2	破碎残渣	不燃・粗大ごみ処理施設で燃やさないごみや粗大ごみを破碎処理し、金属等の有価物を選別回収したあとに残った残渣のこと。
資料 2	処理残渣	プラスチック類処理施設での選別処理後に生じる残渣（朝霞市では、軟質プラスチック、硬質プラスチック、残渣ペットボトル、和光市ではその他プラスチックが該当）のこと。
資料 2	計画年間日平均処理量	廃棄物処理施設において、1 年間に処理する計画処理量の全量（計画年間処理量）を年間日数 365 日で割った 1 日当たりの処理量のこと。
資料 2	実稼働率	年間 365 日のうち、実際に施設が稼働する計画日数の割合を表す。
資料 2	調整稼働率	施設の設備の故障・修理ややむを得ない一時停止等のために施設の処理能力が低下することを考慮した係数のこと。
資料 2	計画月最大変動係数	廃棄物処理施設におけるごみの搬入は平均的に搬入されず、日々搬入量の変動する。このため、年間で最も変動が大きくなる月においても処理が可能なように、施設規模に対して余裕を確保するための係数のこと。
資料 3	単位体積重量	ごみ 1m ³ あたりの重量を表す。
資料 3	三成分値	ごみを乾燥させて軽くなった部分の重量が水分、燃焼させて軽くなった部分の重量が可燃分、燃焼後に残った部分の重量が灰分とし、ごみの組成を表す。
資料 3	低位発熱量	ごみが燃える際に発生する熱量のうち、ごみ中に存在する水分の蒸発による熱量を除いた発熱量のこと。ごみ焼却施設の設計に影響する指標となる。
資料 3	ごみ質	ごみの性質を表す指標のことで、「単位体積重量」、「三成分値」、「低位発熱量」、「種類組成」、「元素組成」を総称している。
資料 5	ばいじん	ごみを焼却処理した際に発生する煙中や煤（すす）や塵（ちり）等に含まれる微粒子のこと。
資料 5	硫黄酸化物	ごみを焼却処理した際にごみ中に存在する硫黄（S）分が反応し、生成される有害な化合物（SO _x ）のこと。

該当資料	用語	用語の説明
資料 5	窒素酸化物	ごみを焼却処理した際にごみ中に存在する窒素 (N) 分や大気中の窒素分が反応し、生成される有害な化合物 (NO _x) のこと。
資料 5	塩化水素	ごみを焼却処理した際にごみ中に存在する塩化ビニル等の塩素 (Cl) 分が反応し、生成される有害な化合物のこと。
資料 5	ダイオキシン類	塩化水素と同様に、ごみを焼却処理した際にごみ中に存在する塩素 (Cl) が反応し、生成される有害な物質のこと。
資料 5	K 値	大気汚染防止法 (1968 年) に基づくばい煙 (ごみを焼却処理した際に発生する煙やスス) 中の硫黄酸化物の排出規制における規制式に用いられている値。 硫黄酸化物の排出規制は以下の式を用いる。 $q = K \times 10^{-3} He^2$ q : 許容される硫黄酸化物の排出量 (Nm³/h) He : 有効煙突高 (m) K 値は地表最大濃度に関するパラメータとなる。
資料 6	バグフィルタ	ごみの焼却に伴い発生する排ガスの処理装置の 1 つで代表的なろ過式集じん装置。排ガスがバグフィルタ内に装着されたろ布を通過する際に、排ガス中のダスト (飛灰) がろ布表面に堆積されて集じんが行われることで排ガス処理を行う。
資料 6	触媒脱硝装置	ごみの焼却に伴い発生する排ガスの処理装置の 1 つで代表的な装置。排ガス中に含まれる窒素酸化物を、触媒を用いて、アンモニアと反応させ、窒素と水に分解し無害化処理を行う。
資料 6	スラグ、メタル	焼却施設でごみを焼却処理した後に排出される焼却灰を 1,300℃ 以上の高温で熔融し、固化した固形物のうち、磁石につかないもの (スラグ) とつくもの (メタル) に分かれる。
資料 6	コークス	石炭を高温で乾留し、硫黄やアンモニア等不純物質を取り除き、石炭より発熱量を上昇させた燃料の一種である。
資料 6	工業塩	ガス化改質方式でごみを処理した場合に副生成物として生成される物質で製鉄産業等において有効利用される。
資料 6	金属水酸化物	ガス化改質方式でごみを処理した場合に副生成物として生成される金属を含む化合物のことで、製鉄産業等において有効利用される。
資料 8	ランプウェイ方式	地上 2 階等にごみの受入のためのプラットホームを設け、地表面からプラットホームまでを斜路で接続する方式。